

資料を読ませ、それに関する課題を与えて論じさせる方法（いわゆる資料型）が概して成功しているようである。それに対して、テーマを与えて書かせる方法（いわゆる課題型）では、テーマによって出来・不出来（運・不運）の差が大きくなるとか、評価が難しくなるなど、いろいろ問題があるようであるが、まだ明確な結論が出るほどデータが集まっているわけではない。また、試験時間は120分、解答は1200字以内が妥当であるという具体的な結論を示した大学もある。

評価方法や評価基準は、評価の妥当性や公平性の確保のため極めて重要と思われるが、①例えば、問題把握力、論理の一貫性、表現の豊かさなどの評価項目をいくつか設定して、各評価項目ごとに具体的な評価の観点とスケールを示して、それに採点者の総合印象点を加味する。

②1つの答案を4名の採点者がそれぞれ別個に採点し、それらの点数の合計をその答案の得点とする。③採点者の組合せを答案ごとに変える。④採点は同一場所で、同じ時間に行う、などの具体的方法を報告している大学もある。

小論文の成績が、共通第1次学力試験の成績や2次試験のどの成績とも相関しない（相関が極めて低い）ということは、ほとんどの大学に共通した傾向のようである。小論文には、通常の学科試験とは異なる能力評価が含まれていると断言している大学がある一方、小論文試験の実施方法や評価方法について、さらに継続的な検討を要すると結論している大学もある。また、昭和62年度に小論文試験を新たに加えたある大学学部では、小論文が加わったことによって従来ならば不合格になるべき者が合格し、約11%の受験生が影響を受けたと報告している。

高校調査書

各大学における共通第1次学力試験への対応も定着し、次第にそれを重視する方向に向かっている過程で、高校調査書に対する分析はますます広範化しつつある。また、推薦入学制の導入、欠員補充第2次募集に伴う高校調査書の活用、さらには高校調査書を共通第1次、第2次試験と併せて配点化する大学もあり、高校調査書の大学入試全般に占める位置付けは高まりつつある。これらのことは、各大学において社会的要請に対応した大学入試の改善に努力しつ

あることを現していると評価してよいであろう。

高校調査書と入試成績

共通第1次学力試験成績、第2次学力検査成績、第1次第2次総合成績と高校調査書との相関についての分析は、従前と同様に相当多くの大学で行われている。その結果は一般的に見て、共通第1次との相関係数は高く、第2次との相関係数は低い傾向を現している。

また、高校調査書と入試成績との相関分析において、調査書の評定平均値を対象とするのみでなく、各教科別に相関係数を求めて分析する大学も多くなってきている。これは、第1次・第2次試験の教科目の配点や第2次試験の教科目の内容点検にとって高校調査書との関係が基礎的資料として重要であることから必然的な方向といえるであろう。

高校調査書並びに第1次・第2次試験得点を受験者高校単位で把握し、一定の方法で総合分析して各高校別のランク付けを明らかにすることも、前年度に引き続き実施する大学が増加しつつある。これは特に地方大学において受験者が多い地元高校の学力向上を促進するために必要な一つの参考資料を提供する上で、重要な意味を持つものといえるであろう。事例として秋田大学について見ると、受験者は東北29%、中部25%、関東12%、北海道11%であり、総じて地元秋田県を中心にその周辺の道県が多くなっているが、高校別のランクを次の方法で検証している。

各高校の共通1次試験総合得点を各高校の総合評定平均で割り、高校評定1点あたりに占める共通1次試験成績の獲得点(N)/対象高校全体の得点平均(M)=F値とし、F値の平均(\bar{x}) $\pm 0.5SD$ を中位(3)とし、上下に1SDずつで区切り、上位(5)、中の上位(4)、中の下位(2)、下位(1)として並べて見た。その結果、地元秋田県では上位1校、中の上位2校、中位8校、中の下位8校、下位3校となり、中位以下の段階にある高校が多く、地元高校の得点獲得率が相対的に低位である状況が明らかにされている。

高校調査書成績と合格率

高校調査書に基づく学力成績を分析するために、合格率との関係を調査している大学が若干ある。この場合、高校調査書と合格率の相関は高いのが一般的であり、奈良教育大学の調査では、各教科ごとに合格者と不合格者の評定平均値を比較した結果、すべての教科で合格者のほうが成績がよかったことが明らかにされている。この点、高校調査書の学力判断に関する信頼度は高いことを現している。ただし、東京医科歯科大学の医学部の場合は高校調査書評定平均値と合格率との間に正の相関が見られない。これは現役合格者が30~40%程度で、浪人・大学卒等の合格者が多く、浪人・大学卒等の高校調査書の成績が現役より低いことによるものと思われる。

高校調査書成績と入学後の成績

高校調査書評定平均値と入学後の教養成績、専門課程成績、卒業時総合成績等との相関についての分析を行っている大学も相当数見受けられる。なかでも教養成績との相関について分析している大学が多いが、その相関は共通1次・2次試験成績と高校調査書成績との相関よりもかなり高いことが明らかにされている。例えば、北海道大学では昭和60年度入学者について進学系別に高校成績と教養成績との相関を調査しているが、高校成績と第1次試験、第2次試験との相関よりも、かなり大きな値となることを示している。また、名古屋大学では昭和60、61年

度入学者について科目別に教養部成績と高校調査書、第1次、第2次試験の相関を求めているが、同じような値を得ている。

専門課程成績、卒業時総合成績と高校調査書成績との関連について分析している大学においても概して相関が高い結果が得られている。例えば、秋田大学医学部における昭和55年度入学者の追跡調査によると、入試成績と入学後の成績とでは各科目とも相関は乏しかったが、高校調査書の国語、社会と教養成績、国語、社会、数学、理科及び平均と基礎及び臨床医学成績、国語、社会、理科及び平均と入学後成績の総計との間に有意な相関が見られたと報告されている。また、奈良教育大学では昭和62年3月卒業生277名について高校調査書成績概評別に大学4年間の成績を分析した結果、成績概評の良い者ほど大学での成績が良かったと報告されている。

なお、留年・退学者と高校調査書成績との関連について調査している大学も若干あり、相関性は高いとの判定がなされている。

高校調査書と医師国家試験との関連

秋田大学医学部の場合は、高校成績と国試不合格者との間には、特に統計的有意差は見られないとされているが、宮崎医科大学の場合は、昭和55～63年の9年間の卒業生835名を調査した結果、高校調査書概評が低位になるに伴って国試受験生の不合格率が上昇していると報告されている。

高校調査書と推薦入学制

推薦入学制の実施に当たっては、その選抜において高校調査書が重要な資料となることは言うまでもない。その関係で、推薦入学制度実施基準設定(北海道教育大学、愛知教育大学)、高校調査書の高校間格差の取扱い(秋田大学鉱山学部)に必要な資料を得るための調査や推薦入学者と一般入学者の比較検討資料としての追跡調査(室蘭工業大学、徳島大学)などが、高校調査書、入試成績、入学後成績の関連を分析する方法で行われている。